ミニ北斗だより

令和７年度　第６号
（９月１日発行）
愛媛県立今治北高等学校

人生は挑戦なり

生徒課長　　重澤　和史

今夏の「第 107 回高校野球選手権愛媛大会」の開会式の日に、愛媛朝日テレビのゲスト解説で来られていた長嶋三奈さんと話をさせてもらう機会があった。これまでに何度か取材していただくことがあり、同い年ということもあって親交があったため、少し時間をいただいた。

６月に「ミスタージャイアンツ」「ミスタープロ野球」と国民に親しまれた、父親の長嶋茂雄さん（享年 89 歳）がご逝去され、「少しは落ち着きましたか？」と尋ねると、「ふと一人になる時、喪失感というのか、心にポッカリと穴が空いたような感覚を抱きます」と言っていた。「でも、監督が亡くなった日は、奇しくも私の誕生日だったんですよ！」「しかも、89 歳、８９（や・きゅう）じゃないですか！」と、気丈にも明るく振る舞っていたのが印象的だった。

その長嶋三奈さんに、「監督の人生は、どんな人生だったのですか？」と質問してみると、「監督はまさに努力、挑戦の人でした」と断言された。父は、よく「天才」「スター」と言われていたけども、間違いなく努力の人だった。お客さんにはいいものだけをお見せする。暗い隠れた部分は絶対に見せるもんじゃない。これがプロの姿勢。スターと言われる人たちには、それなりの試練や努力というものがある。しかし、その裏の動きみたいなものは絶対、表に出しちゃいけない。我々は表のいい面、いわゆる格好良さだけを見せれば、それでいいんだよ。と、よく話していたそうである。「ミスター」と言われた所以が垣間見えた。

また、「監督は、努力、挑戦の人でありながら、表裏のないフランクな人柄で、他人の悪口をとても嫌いました。」とも言われていた。相手が有名な野球選手であろうが、名もない少年野球のメンバーであろうが、誰に対しても同じ目線で接し、語り合っていたそうだ。「国民的スター」であり続けた理由がそこにあると、敬服した次第である。

監督が努力、挑戦の人であることを何よりも強く感じたのは、2004 年３月、68 歳の時に脳梗塞で倒れた後の驚くべき執念だったという。主治医の診断は「重症で、歩くことは困難だろう」と言われたそうだ。確かに監督の顔は大きくむくみ、まるで別人だった。ところが、間近に迫ったアテネ五輪で何としても日の丸を背負って指揮を執るんだ、という目標が監督を突き動かしたのだろうか。わずか四日目にはベッドから起き上がり、一か月ほどで歩けるまでになり、奇跡とも言うべき回復力だったそうだ。リハビリも通常のリハビリではなく、希望して、プレートで負荷を掛けて、強く引き上げるといった、かなり強い痛みが伴うものを続けたそうだ。監督はそれに耐え抜いたという。

監督は最晩年まで、自分にはまだまだやり残したことがあるという気持ちをずっと抱いており、その一つが野球を通して子どもたちの夢を育むことだったそうだ。監督はアテネ五輪の指揮を執ることは叶わなかったが、帰国した選手たちに向かって「君たちはとてもいい経験をした。これからは野球の素晴らしさを子どもたちに伝えて欲しい」と呼びかけたそうだ。

この夏の長嶋三奈さんと話をさせていただいて、自分も、レベルは違えども「努力と挑戦する人生でありたい」と強く感じた。

※お気付きの点や、御意見･御質問などありましたら、下に記入の上、お子さんを通じて担任まで御提出ください。

今治北高校の日々の様子をホームページに掲載しています。「今北日記」「生徒の活動」「部活動」など、ぜひ御覧ください。

今治北高等学校　学校公式サイト　https://imabarikita-h.esnet.ed.jp

- - - - - - - - - - - - - - - - - -　切　り　取　り　- - - - - - - - - - - - - - - - - -

＿＿年　＿＿組　名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿